

前書き

この文章は、平成二十九年（二〇一七）十二月十六日から令和二年（二〇二〇）十一月三十日まで、の間、五回にわたって、二十世紀文学研究会（語学の教員たちによる文学同人会。六十年近く続いてきている）で話したことをまとめたものです。話し言葉がもとになっていますので、その風合いも大事にしたく、あえて書き言葉には直しませんでした。なお、文章のところどころに、話の内容を短くまとめた言葉が先行していますが、それは私が話しやすいようにつけたもので、目次としてもわかりやすいということなので、そのままにしてあります。

序章 話の発端（私の芥川賞授賞式における小島さんの一言）

小島さんの略歴

さて、ここにお集まりになった方々は、皆さん、小島信夫とはどういう人か、すでにおわかりであると思います。それを前提としてお話しさせていただきますが、念のため、略歴を簡単に言いますと、小島さんは大正四年（一九一五）、現在の岐阜市に生まれ、平成十八年（二〇〇六）、今から十四年前に、九十一歳で亡くなりました。安岡章太郎、吉行淳之介、庄野潤三などと共に「第三の新人」と言われた作家の一人で、「アメリカン・スクール」で芥川賞を取られた後、『抱擁家族』で小説家としての立場を確立され、やがて、『別れる理由』という、小説の常識を破る大作を書いて世間の評判となり、晩年になっても精力的に、小説の様々な可能性を探る長篇をいくつか書き続けました。難解で、前衛的であるとも言われましたが、若い作家たちに大きな影響を与えました。

私は、小島さんが「アメリカン・スクール」で芥川賞を取られてから間もなくお会いしまして、それからお亡くなりになるまで五十年余りの間、私の小説の恩師であったばかりでなく、家族的にも親戚同様、ときにはそれ以上に親しくさせていただきました。

芥川賞授賞式の私のスピーチに対する小島さんの一言

ところで、それほど親しくしていただいた小島さんについてお話しするのは、小島さんが亡くなった直後の「お別れの会」以来、はじめてのことです。本日、こうやって皆さん方の前で、小島さんのことについてお話しできるのは、中村邦生さんのお勧めもあり、二十世紀文学会の皆さん方のご好意のおかげですが、私は私なりに、この機会に話してみたいと思うことがあります。おそれなく、今話すか、文章にしておかなければ、二度と発表する機会は来ないかもしれません。

それはどういうことかと言いますと、小島さんが私に言った、謎めいた一言についてです。

私が昭和六十三年（一九八八）に芥川賞をもらって、その授賞式のスピーチのときに、自分が小説を書きはじめた動機や、どうやって書いたらいいか、などということは、

「すべて小島信夫さんから教わりました。こうやって賞をもらうようになったのも、小島さんのおかげです」

と言って、私が海外から帰国して小島さんの家に寄寓するようになったとき、毎晩、七輪の上で牛鍋やら何やらを作ってくれながら、私を相手にえんえんと文学の話をしたことなどを、かなり長い時間をかけて話しました。後で編集者の一人から「あんなに長いスピーチは珍しい」と半分皮肉

を言われたほどです。

ところが、その後で小島さんを見ると、何となく浮かない顔をしているんです。小島さんは、人から褒められたりしても、嬉しそうな顔などしない人で、特に周囲に気を使う人でした。私も、ちよつと言い過ぎたかな、と思ったのですが、そのとき、彼は、こんなことを言ったのです。

「あれはウソだろう。かえって迷惑だったんじゃないか」

人の話の裏を見る、人の話に限らず、何事もその裏を見るのが小島流ですが、私は思わずキョトンとして、小島さんの顔を眺めました。

「すべて教わった」というのは、決してウソではなかったからです。

そのときは、続けて話をしようにも、会場の混雑に紛れて、それっきりになってしまい、それから、それについて触れる機会がないまま過ぎてしまったのですが、小島さんの言葉はずっと頭にこびりついたまま残っていました。

私は、小島さんの思い過ごし、考えすぎだと、長いこと思っていたのですが、それから何年も経ったある日、ひよつとすると、小島さんの言ったことは案外正鵠を得ていたかもしれない、と思つたのです。「ウソ」ではないまでも、別な考え方もあつたかもしれない。あの頃は受賞の騒ぎや会場の雰囲気や、その後の生活の変化などに呑み込まれて、冷静に考える余裕など生まれなかつた。

「いや、小島さんという人はおそろしい、そんなことを考えていたのか」と、改めて小島さんの洞察力の鋭さに感心した次第です。

今日は、これからそのことについて、小島さんが言ったことは、本当にあり得たのだろうか、ということを、小島さんと私の付き合いの歴史の中で探っていきたいと思います。できるだけ具体的に、事実に即してお話ししたいと思いますが、話しているうちにあちこち脱線するかもしれません。それも小島流でおもしろい、と書いていただければ幸いです。